

日本化学療法学会誌発刊の辞

EHRLICH によつて提唱された化学療法はサルパルサンの発見によつてその名を博し、その後進歩は遅々たるの感があつたが、程経て DOMAGK の研究発表を契機としてサルファ剤の治療が完成し、更に第 2 次世界大戦来ペニシリンに始まる相次ぐ抗生物質の登場と共に、ストレプトマイシンその他の抗結核剤の出現によつて、化学療法は正に百花爛漫、今日の隆盛を招来したのである。かくて最近における化学療法の進歩は実に劃期的であつて、本世紀が遂げた治療医学発達の高冠たるものというも過言ではなからう。しかも化学療法今後の進歩も停止することを知らない有様であり、やがては人類より伝染病の放逐、進んでは癌その他の悪性腫瘍に対する化学療法の完成も期待される所である。

我が国では昭和 21 年 8 月、早くも日本ペニシリン学術協議会が生まれ、後日本抗生物質学術協議会と改められ、早くより「The Journal of Antibiotics」なる雑誌が刊行されている。抗生物質学術協議会は基礎的方面と臨床的方面とに分けられ、それぞれ熱心な研究が続けられ、注目すべき幾多の業績が発表されている。殊に臨床部会は関東地区においては当初の頃より毎月発表会が開かれていたが、間もなく関西その他の地区においても同様な地方部会が組織せられた。最近両 3 年は関東及び関西地区にて春秋 2 回合同部会が催され、その発表内容も著しく充実して来たと共に、同好の研究者は次第に全国より参集するようになり、全く学会的性格を帯びるに至つた。その間向学旺盛なる若き研究者よりはこれを日本化学療法学会に迄発展させるよう熱烈な要望があり、遂に昨年(昭和 27 年)の第 6 回東西合同部会において多数の全列席者により学会設立の決議が行われた。即ちこの学会への気運は真に力強い自然に盛り上つたものであり、また当然の勢いでもあつたのである。

ここにおいて主として東西臨床部会及び細菌学会の熱意ある研究者が中心となり日本化学療法学会設立準備委員会が結成せられ、数次に亘る委員会を開き学会発足への諸般の準備を整え、広く全国関係方面の研究者に発起人を依頼したところ、非常に多数におよぶ各位より同意を得たのである。なお私は 2 月 28 日開催された最終準備委員会において理事長兼第 1 回総会会長に推されたので、及ばずながら最善の努力を傾けるべくこれを受諾した。よつて発起人を通じて全国的に会員募集を行うと共に、第 1 回総会開催通知、演題募集を行い、第 1 回総会は昭和 28 年 7 月 4 日及び 5 日の両日に亘り、慶応義塾大学医学部北里講堂にて開催せられ盛會を極めたのである。一般講演は学会の性質上極めて広汎な諸方面に亘る内容を包含していることは本誌に抄録されている通りである。なお特別講演として演出された基礎的方面東京大学教授秋葉朝一郎博士の「薬剤耐性の成立と阻止の機序」、臨床的方面慶応大学教授三方一博博士の「亜急性細菌性心内膜炎の治療」は共に本総會に花を飾つたものであつた。

今化学療法学会の性格について考えて見るに、従来成立している多くの医学分科会が横に並列している系統学会であるに対し、本学会はこれ等各分科会を縦に連絡する点において全く趣きを異にする学会であるのを思うのである。しかも本学会は基礎及び臨床医学各分科を結ぶのみならず、薬学は勿論、歯学、獣医学、更に農学、理学方面にも密接な関係を有し、化学療法に包含される領域は極めて広汎に及ぶ。本来科学の進歩につれて、一つの領域は次第にいくつかの専門分野に分科して行くのが常であるのに、このような化学療法学会は既に専門化している諸科学を再び綜合して行くものであり、この全面的協力により、その進歩を一層強く促進するものである。この意味において本会の結成は真に意義深く、特に保健上人類にもたらす福祉増進の測り知れない化学療法発達の重要性を惟う時、私は本誌創刊を祝福すると共に、新たに誕生した本学会が各方面研究者の緊密な結合によつて益々発展するよう祈つてやまないものである。

昭和 28 年 9 月

佐々貫之識